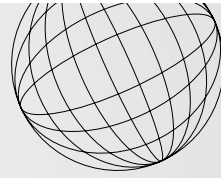


# 世界をみつめて2



## ケータイを持たないサル

梶川 裕司

霊長類のコミュニケーション研究の権威である京大霊長類研究所教授・正高信男氏の著書「ケータイを持ったサル」（中公新書 2003年）はベストセラーである。出版当時、この本を書店で目にした大人たちは「携帯電話を使っている若者たちは、やっぱりサルだったんだ」と溜飲を下げ、同書の売り上げに貢献した。このように同書がベストセラーになった理由の一つは、そのインパクトあるタイトルである。だが、このタイトルのアイデアは、正高信男氏のオリジナルではない。比較行動学者（動物行動学者）のなかで、もっとも名の知られているデズモンド・モリス氏の著書で、世界的なベストセラーとなった「裸のサル」（河出書房新社 1969年）のパロディである。「裸のサル」は、人間を、ただ毛の生えていないサルであるという観点から分析し、センセーションを巻き起こした。この観点から言えば、大学生は「学問を学ぶサル」であるし、私は「教育心理学を教えるサル」である。

「ケータイを持ったサル」が出版された頃、ある雑誌に『24時間臨戦態勢』という見出しがあった。これは恋人からの電話やメールが24時間、いつ着信するかも知れず、それに対して、夜中でも、授業中でも、アルバイト中でも、走っていても、それに即座に誠意を持って応答する若者たちのけなげな姿を端的にあらわしていた。なるほどと思ったと同時に、自分は、こういうことに関して、過去の人間でよかったと思った。私の時代ならば、彼女とコミュニケーションできるのは会っているときだけ。家には電話はあるが、それは一家に一台、家族が集う居間にあるだけである。衆人環視のなかで彼女と親密な会話ができるわけがない（ちなみにそのころの学生の下宿にも個人の電話はない。管理人さんの部屋の前の共同電話が一般的であった）。昔の恋愛にはオフの時間があつたのである。平安貴

族が、月の出ていない期間は恋人の家に通えず、その間に、さらに思いを募らせ、歌を詠んだというようなオフの時間には恋愛において、とても意義があると思うのだが。

また、われわれ旧人は、約束の時間を守ることを社会人として守るべき最低限のルールと考えるが、若い人たちではケータイの登場によって、決まった時間に決まった場所で会うという「約束」の概念が希薄化している。ケータイを使えば、互いに位置確認しながら、それぞれの到達時間と労力をもっとも少ない場所を、臨機応変に決めることができる。これは待ち合わせの革命である。しかし、その結果、場所、時間固定のいろいろな行事で、遅刻者が増えているような気がする。どうだろうか。

「ケータイを持ったサル」の出版当時は、若者文化の象徴がケータイであったが、今では、小学生から80歳超の老人まで、ケータイにどっぷり漬っている。それはわが国だけではない。TVを見れば、多くの国々で人々がケータイでコミュニケーションしている姿が映し出される。ケータイは地球規模のコミュニケーション革命を起こした。けれど、この革命が「サル化」というネガティブな変化なのか、それともポジティブな変化なのかの見極めは、今の私には、まったくできない。

そこで私は、自らを被験体として、ひとつの実験をおこなっている。私は情報関係の仕事をしているにもかかわらずケータイを持っていない。つまり私は「ケータイを持たないサル」なのである。「ケータイを持たないサル」は、「群れ」のなかで、これからどのような扱いをうけるのだろうか。

かじかわ ゆうじ

（マルチメディア教育研究センター副センター長・教授・教育心理学）